

郷土高槻叢書 第八集

藤澤 長治 著

高槻市  
天神山  
彌生式時代遺跡発掘報告

高槻市教育委員会



B5区土器大型片密集部

(春日丘高校 小西君撮影)



B9~10区土器大型片密集部

(春日丘高校 小西君撮影)

目次

一、まえがき ..... 一

二、発掘の実施と遺跡の状態 ..... 三

三、遺物 ..... 一三

四、あとがき ..... 二二

挿図目次

才一 遺跡附近地形図（地理調査所約六千分の一地形図「高槻」） ..... 二

才二 区劃説明図 ..... 六

才三 発掘地区実測図 ..... 一一

才四 石鏃等実測図 ..... 一五

才五 石斧実測図 ..... 一六

才六 土器実測図 (I) ..... 一七

才七 土器実測図 (II) ..... 二〇

才八 須恵器実測図 ..... 二一



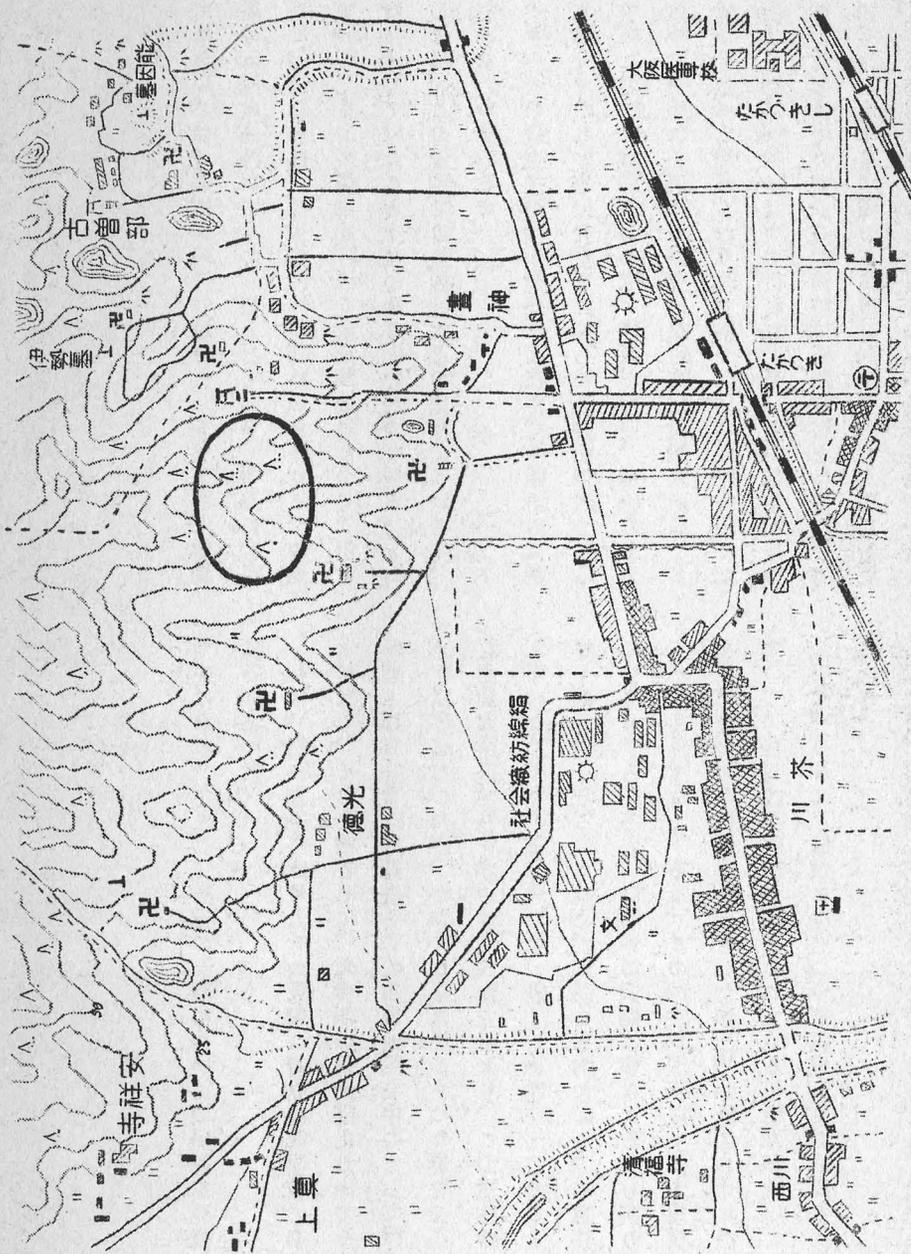
この高槻市においては、彌生式時代の遺跡として、京都大学農学部附属農場の安満の遺跡が古くから知られており、学界に有名である<sup>①</sup>。この遺跡からは、彌生式時代の初めから終りまでの遺物が出土していて、こゝに彌生式時代の全期間にわたつて、引きつづき人々が生活していたことをはつきりと物語つてゐる。しかし残念なことには、この遺跡では住居址などの様相については、全くわかつていないのである。

ところが、今一つの彌生式時代の遺跡の存在が前の戦争中に明らかになつてきた。これが今回発掘を実施した天神山遺跡である。即ち、戦争中にこの地で陸軍の工兵隊が作業を行い、遺物の出土を見たのであつて、それを現在の国立奈良古文化財研究所員である坪井清足氏が始めて注意されたのであつた。この坪井氏によるごく小規模な発掘は戦後になつて行われ、又、その後も引きつづき注意を払われて来ていて、この遺跡は安満遺跡とはちがつて、大体、彌生式時代の中でも中頃のみに限られるものであることを認められるに至つていた。しかし、何分にも小規模の発掘であつて、その成果も一般に公表されるまでには至つていない。その他に、古代学研究会員の免山篤氏は、この遺跡に久しく注意を払い

つづけられ、主として出土の石器についての研究を発表されるところがあつた<sup>②</sup>。

私は、昭和三十年四月より大阪府の府立高等学校に奉職することになり、それを機として、考古学の現段階においてその必要を痛感されている地域調査をこの三島地区を中心として行うことを志すようになったが、かねてから面識のあつた春日丘高校出身、立命館大学史学科在学中の池田寿夫君より、この遺跡が近年土木工事のために相当破壊されて、多くの遺物を出したことを聞き及び、四月二十三日にはじめて同君の案内により、本遺跡を訪れたのである。ところが、数年来の道路工事による切り割りの断面をくわしく見て行くうちに、この遺跡が予想以上に大規模なものであり、また処々に遺物を包含した黒土層が地山の中に落ちくぼんでいて、堅穴式住居址が切断されている可能性が濃いことに気がついた。こゝに、破壊に先立つ學術調査実施の必要を痛感したのである。

そこで、各方面に連絡をつけて行つたところ、地元の島上高等学校の歴史研究部には、すでに中学校の頃よりずっとこの遺跡に関心を持ち、常に注意を払つて来た西谷正君という熱心な生徒が



才一 遺跡附近地形図

部員として在学し、歴史研究部はこの遺跡の調査を試みようとして、顧問の根津知男先生を中心として努力しておられることを知った。また、高槻市立才一中学校の校長であつて、高槻市の市史編纂委員をしておられる天野高信先生を会長とする三島研土史研究会があり、この地の学校の先生方や生徒諸君、地方史家の方々などによつて、郷土史研究の態勢ができてきていて、種々の活動が活潑に行われていることを知つたのである。

このように条件と機運が相当に熟していたところであつたので、五月十一日に島上高等学校において才一回の連絡会が持たれて以来、急速に事は運ばれ、八月初旬を期して、三島郷土史研究会を

主体とし、高槻市の援助を受けて、天神山遺跡の発掘が実施されることになつたのである。

① 島田貞彦・水野精一・小川五郎・三宅宗悦「摂津国高槻

撰津農場石器時代遺跡調査報告」(『人類学雑誌』才四

四卷才七号)、小林行雄「安満B類土器考」(『考古

学』才三卷才四号)参照。

② 兔山篤「高槻市天神山彌生式遺跡」(『古代学』六号)

参照。

## 二、発掘の実施と遺跡の状態

これより、今回の発掘について具体的に述べ行くことにするが、特に発掘実施中の毎日の状況について、やや複雑なまでに詳しく述べて行くのは、学問的な発掘が一体どのように面倒で、慎重さを要するものであるかを知つていただきたいからである。

発掘実施に当つては、大体次のような基本方針が立てられた。

才一に、発掘の主体が三島郷土史研究会に置かれたことから明らかのように、一部の学者を本位とする発掘ではなく、地元の人

々を中心として、郷土の歴史を明かせる方針をつらぬくことである。具体的に言えば、実際の仕事を進めて行くのは、島上・茨木・春日丘・吹田の四高等学校と浪速工業高等学校の歴史研究部の生徒諸君及び同じく地元の中小学校の生徒諸君であつて、生徒諸君の自主的な勉学に役立つように計画し、又、特に夏休み中の炎暑の下で行うので、無理な計画は絶対に避けるように留意し、しかも一方において、学問的な、また発掘技術上の指導を強化し

て、学問的な水準を高く保つたための最大の努力を行うこととした。

才二には、学問的な面に関しては、まず本遺跡の年代を確実につかむことである。本遺跡の年代についてはすでに述べたように大体彌生式時代の中頃に限られると推定されているのであるが、これを更に確実な証拠の上に立って検討することである。高槻には一方に彌生式時代の全時期に通ずる安瀆の遺跡が存在するのでそれとの関連をどのように考えるかと言う上からでもこのことは必要であり、また、全国的に言つても、彌生式時代の中頃には、山手に新しい大聚落が形成される傾向が注意されているので、この遺跡も又、その例に加わるかどうかを確める必要があつた。その上に、戦後、高槻市内より銅鐸の出土が伝えられ、その行方が一時不明となつていたが、最近東京大学の教養学部で購入されたものがその銅鐸であることが推定され<sup>①</sup>、しかも、これが本遺跡に関連するものと思われるので、銅鐸の埋められた年代を考える上でも、この遺跡の継続年代を確認する必要があつたのである。才三には、これも学問的な問題であるが、遺物の蒐集を目的とする発掘ではなく、当時の人々の生活、特に当時の社会組織までも考える資料を得ることを目的として、住居址の実態を明らかにすることを旨とするのである。勿論これは非常にむずかしい問題であり、彌生式時代の聚落に関する研究は甚だおくれっていて、戦後、有名な静岡県の登呂遺跡などの調査を機として、徐々に明ら

かになつて来たにすぎず、特に近畿地方においては、低地の聚落の住居址についてはわずかに知られていても、山手に立地する彌生式時代の聚落の住居址については殆ど知られていないと言つてよく、また、今までの少数の経験聞いて見ても、その調査が非常に困難なものであることはほぼ推定できたのであるけれども、このような調査に対する少しの手がかりでも、また、経験でも得られればと考へて、あえてこのような目的を立てた。それは、単に遺物の変遷を追究するだけでは、歴史を明らかにする上で充分でなく、社会組織の変化を知らなければならぬのであるから、そのためにはたとえ困難であろうとも、住居址の調査をこれから重要視して行かなければならないからである。今回の発掘調査にあつては、後述するように遺物が少いのは、このような目的が主となつた必然的な結果である。しかも、こゝで意図した住居址の解明も甚だ不充分であつたが、少くとも、このような調査を行う場合には、どこに困難があり、今後どのような点に注意すべきかという見通しだけは得ることができたのである。

大体、以上のような方針によつて発掘を開始したわけであるが、具体的な発掘の記述に入るに先立つて、順序として遺跡全体の状態から述べて行くことにする。(才一図参照)

高槻市の北郊外の山手にある天満宮の左手に作られた新道は登り坂となり、一応登りつめたところで左曲して貯水槽の東側に至

り、再び左曲して下り坂となり、市宮の火葬場の西側を通り、霊松寺の裏手に出で、寺の東側を通つて、再び市街地の方へと歸つてゐる。結局、この新道は逆のU字形を描き、その中に南へ延びる一つの小さな尾根とその両側の二つの谷とを包み込んでゐるのであるが、この道による切り通しの断面には至るところに遺物包含層が露出していて、附近一帯——その正確な境界は未だ明確にし難いが——恐らく、東西・南北とも二百米を越える地域が彌生式時代の遺跡であることを示している。先に述べたように、住居址の調査を才一の目標とする以上は、この切り通しの面にあらわれた遺物包含層と地山との關係に注目して、これを手がかりとして適切な発掘地点を選ばなければならない。神社の左手から道を登つて行くと、社殿の西方に当るあたりの切り通しの面に、先ず数ヶの遺物包含層が地山へ落ち窪んでゐるのが認められるが、この場所は西方に面する急な傾斜面であるために、発掘するとすると排土の便が至つて悪く、また、急傾斜面であることから考へて、住居址としては有望でないと判断し、手をつけないこととした。次に、貯水槽の東方に当るや、広い平坦部が道路によつて切斷されていて、最も確実らしい竪穴式住居址の断面と推定されるものが、道路の北側の切り通しに一ヶ処露出しているが、上面が畑になつていて作物が作られてゐるために、残念ながらこの地点も断念することにした。さて、火葬場の西側には、火葬場の敷地と道

路とによつて切り取られて残つた雑木材の一区劃があり、その切り通しの断面にもやはり明確な遺物包含層の落ち窪みが認められる。人員と日数とを考え合せた上で、こゝなら一応完結した発掘を実施することができると見通しがあり、また、住居址出現の可能性も濃く、更には、幸い土地所有者たる高槻市の了解をも得ることができたので、この地点に集中的に力を注ぐことに定め、もし餘裕があり、事情が許すならば、他の地点、特に貯水槽の東方の地点に及びたいと考へた。しかし、結局のところは、この地区の約半分を完全に調査しえたのみであり、他地点には全く手をつけるに至らなかつた。これは、前述したように、高校生が主体となつた発掘であつて、体力、日時の面でつとめて無理をさけたこともその理由の一つである。

以下は、日記風に作業の進捗状況と、それによつて明らかになつた遺跡の状態とについて述べて行こう。

八月一日(月)

午前九時、発掘本部の霊松寺に集合。

すでに準備会で打ち合せてあつたように、庶務会計を島上高等学校の根津知男先生、生徒の総指揮を茨木高等学校の東晶先生、各校の生徒の指導を各校の先生方、各校を代表して生徒の委員を一名ずつ、発掘の技術指導面を藤沢及び京都大学文学部考古学教室の大学院学生小野山節氏という構成のもとに、これからの十日

間の発掘を開始することとし、種々の打ち合せや準備を行う。以後の十日間は、人員に多少の増減はあつたが、各校の先生方十名餘、生徒約五十名にて、休日なく仕事は進められた。

発掘開始前の諸準備に約一時間を費して後、十時より約一時間にわたり、全員にて遺跡全体を見て歩いた。これは遺跡の現状を皆がよく把握しておくためである。

十一時より、発掘地点の灌木、草の除去作業にうつり、十二時に一たん中止、二時より四時三十分まで作業を続行した。本日にて発掘予定地の全面の草刈りを終了し、木の根の除去も約半分を終つた。

今後、原則として作業は午前九時から十二時、午後二時から四時三十分の合計五時間三十分とし、二交替制、又は休息時間を充分に交えて行うことにし、十日間、大体この方法を守つて行つた。

八月二日(火)

本日の午前中は昨日にひきつづいて木の根の除去を行い、一方では多数の杭を用意しておいて、発掘予定地を縦横二米間隔の線にて碁盤目に割つて、線の交差点に杭を打ち、今後の発掘を円滑にする準備を行う(才二図参照)。ほゞ南北に走っている道路を基準とし、南北二十米、東西十六米の区劃を二米平方の正方形に割つたわけで、この区劃と道路との間のみは一米の幅とした。そして、道路側(即ち西側)より一米幅の区域をA、それにつづく

才二図 区劃説明図

	A0	B0	C0	D0	E0	F0	G0	H0	J0	
道 路	A 10	B 10	C 10	D 10	E 10	F 10	G 10	H 10	J 10	J9
		B 9	B8							J8
		B 8	B7							J7
		B 7	B6							J6
		B 6	B5							J5
		B 5	B4							J4
		B 4	B3							J3
		B 3	B2							J2
		B 2	B1							J1
		A 1	B 1	C 1	D 1	E 1	F 1	G 1	H 1	J 10

二米幅ずつとB・C・D・E・F・G・H・J(IとJとはまぎらわしくなるためIを除く)と名づけ、南側より二米幅ずつを1・2・3・4……10と名づけた。従つて、例えばA1・E4・G6等と言う名称によつて各碁盤目を呼ぶことができるようになったわけである。なお杭の番号もこれに関連させてつじた。才二図を見ていたゞくとわかるが、その区の東北隅に区と同じ番号の杭が来るわけである。

杭打ちが終ると、各区大体二名の割り当てにてB2とB10・D2とD10・F2とF7の二四区にわたつて一斉に本格的な発掘を開始した。最初の内は表面の腐蝕土の除去である。発掘地区全般にわたつて少数ながら彌生式土器の細片が出土するが、それと共に須恵器の破片も出土し、後世の攪乱層であることを示している。

午後と同じ要領で作業を続行する。大体表土（腐蝕土）の除去を終つたが、まだ包含層と地山との区別がはつきりとはつかめない。土が夏の日照によつてすぐ乾燥してくるので、包含層と地山との土の色の異同の識別が非常に困難になるらしいのである。そこで一般の作業が終つて後、数名が居残つてB4区の西半を掘り進め、地表下約三十纏までに至つたが、なお土器片の出土を見、また、掘り進むに従つて土の色も黒ずんでいて地山とははつきり区別できそうな見通しがついて来て、少し安心することができた。

八月三日（水）

昨日のように一区劉二名では作業しにくいことがわかつたので、本日からは一区劉四名に編成変えを行うこととし、まずB2とB10、D9、D10の合計十一区に集中して発掘を進めることにする。午前中ではまだ包含層と地山との境界の見当がつかない。午前の作業の終了間ぎわになつて、B9区とB10区の境界にて、土器大型片が密集して存在していることを発見し、これらの土器片はとり上げないまま、慎重に掘り進めて行くことにする。

午後はまず現在発掘しつゝある各区とも、地表下三〇〜三五纏まで掘り下げ、そこで一応水平にすることを目的とした。これは各区において進度がまちまちであつて凹凸がつき、全体の見当がつけにくくなつたためと、今までので場所によつては地表下三〇〜三五纏まで掘り下げたところはあるが、その所見によれば、なお彌生式土器片は細片であり、且つ須恵器片の混入も認められるので、この深さまではまだ攪乱層である見通しがついたからである。また、地表下三〇〜三五纏で一応水平にしたのは、B9区とB10区の土器大型片群が表土下三五纏で現われはじめたので、これ以下の深さは更に慎重に掘り進める必要があると考へたので、一応区切りをつけるためにこゝで水平にして整理したわけである。生徒諸君にとつては発掘ははじめての経験であるので、このような方法も慎重を期するためには必要であつた。この作業を進めている内に、B6とB8区は地山に達したと認められたので、これらの地区では掘ることを止め、その人員はD2とD4区に移動した。

同じく午後、B3区の攪乱層中より、石匱了の破片一個を発見し、B2区の地表下約三五纏の深さより、裏向きになつた状態で完形の器蓋一個と、横倒しになつた高杯の脚部一個とを発見した。（遺物の項参照）

本日の所見によれば、地表下大体三〇〜三五纏までは攪乱層で

あつて、土色はやゝ黒ずんではいるが地山とあまり変らない。しかしそれ以下の深さになると包含層はもはや須恵器の混入はなく彌生式時代の純粹な層であり、土色もずつと黒ずんでいるようである。なお攪乱層は南に向つてゆるやかながらも深さを増している模様であつた。

八月四日(木)

作業区域はB1、B5、B9、B10、D3、D6、D9、D10の合計十三区。

本日特に注意されたことは、道路による切断面の所見から推定して、B1、B2区あたりにて包含層の落ち窪みの南端がつかまえられると考へていたにもかゝらず、なかなかはつきりしないことであつて、D3区においてもやはり南端はつかまえられる。B3区より鉄滓と思われるものが出土し、後に数点、やはり鉄滓らしいものが発見されて興味を引いたが、結局のところ次々に明らかになつて来たのは、発掘地域の南部、約八米幅ぐらひは後世の攪乱がはげしく、この鉄滓らしいものも彌生式時代のものとは考へられないことであつた。実、彌生式時代の純粹の遺物包含層と認められるところからは、鉄滓らしいものは発見されなかつた。前に述べた包含層の落ち窪みの南端がつかまえてくかつたのも、この攪乱の事実によるものと考えられる。

D6区は全面にわたつて包含層が深いようで、B6区が早く地

山に達したのとは全く異つてゐる。

B2区、D4区において地表約四五糎のところより甕の口縁部の大型片を発見する。土師器である。

D9、D10区の土器片密集部は丁寧に原状のまま掘り出し、午後の作業終了時に一応写真を撮しておく。

八月五日(金)

昨日の区劃を引きつづいて発掘し、新たにD7、D8区を加う。本日に至つて、D7、D8区も包含層の深いことが判明し、また、D9、D10区も全面にわたつて包含層が深く、結局、B区とD区とでは包含層の状態が非常に異つてゐることが明瞭になつた。

須恵器の出土状況から考へて、B・D両区とも、昨日考へていたより更に広く、即ち発掘地域のほとんどの南半分は相当深くまで後世の攪乱を受けてゐることが明らかになつて来た。

B9、D10区の土器片密集部を天然色を含む写真撮影を行い、出土状態を実測した後に取り上げる。これらの土器は意識的に置かれたものとは思われず、横倒しになつてゐるものが多く、雑然としてゐる。分明した器形は次の如きものである。

小型 甕(完形品) 一 (遺物の項参照)

甕の口縁部 一 (遺物の項参照)

細頸壺の大片 一 (遺物の項参照)

壺の口縁部 一 (遺物の項参照)

発掘区域の北の畑地にて土器の表面採集を行ったが、その内に高杯のはゞ完形の分るもの一個がある。(遺物の項参照)

八月六日(土)

本日の作業区域は、B2、B5、B9、B10、C9、D4、D10、F5、F6、F9の合計十六区。

新たにC9区に手をつけたのは、B9、B10の土器片群がなお続いているかどうかを確かめるためであり、また、B区とD区との包含層の状態が非常に異つてることがわかつたので、結局C区全体を掘る必要が明らかになつたので先ずこゝから始めたのである。

F区の発掘は包含層の続き工合を確かめることを目的としたのであるが、人員の関係でなかなか進まない。

B4区にて土師器、須恵器のやゝ大きい破片を発見する。

八月七日(日)

本日の作業地区は、B2、B5、B9、B10、C9、C10、D4、D10の合計十四区。

特に著しい新事実はない。

D8区にてはじめて石鏃一個出土。

一般の作業が終了した後、一部の者が残留して、各区の検討とAライン、Cライン(杭の線)の断面を実測する。

八月八日(月)

本日の作業地区はB1、B2、B4、B5、B9、B10、C4、C10、D5、D9の合計十八区。C区の必要地区全面にわたつて発掘を開始したわけである。

又、E6、F6、G6、にまたがる東西方向の幅一米のトレンチ(試掘溝)を掘り始める。大体、発掘はBCDの三区に限らざるを得ない見通しがついて来たので、包含層が更に東方に向つてどのように続いているかを確かめたかつたからである。

C10、D7、D8の三区にて石鏃各一を発見。

B5区にて、先のB9、B10のものに類似した土器大片の密集部を発見し慎重に掘り進めて行く。

八月九日(火)

本日の作業地区は、B4、B5、B9、B10、C4、C10、D4、D9の合計十七区と、昨日に引きつづいての6のE、Gのトレンチ。

C区の状態が漸次明瞭になつてくるにつれて、発掘地域の遺跡の状態がようやく把握できるようになつて来た。遺跡の状態については後に一括して述べることにする。

C5区にて石鏃一個を発見。

八月十日(水)

本日の作業区域は、B1、B5、C4、C9、D4、D9、6

のE-Gのトレンチ。

本日の午前中にて、上述の区域はすべて地山に達し、一応の発掘を終了した。

D10区にて磨製石斧片を発見（石鏃、石斧についてはすべて遺物の項参照）

午後は半数の人員にて後片づけ、残り半数にて遺跡の最終の整理及び実測を行い、終つて全員に発掘現場において最終段階において分つた事実の説明を行う。

その後、発掘本部の霊松寺において全員の茶話会を開き、今回の発掘の反省、感想等を話し合う。

夕方、高槻市の関係者の方々をおまねきして、発掘参加の先生方と共に今後の遺跡の保存等についての相談会を開く。

八月一日（木）

一部の者が残留して、遺跡の実測を完了し、最終段階における遺跡の写真撮影を行い、遺物の整理とその後始末、運搬を行う。

最終段階で判明した限りでの遺跡の状態をこゝで一括して説明することにする（才三図参照。図のA0、G8等の番号は杭である。）

結局、地山に至るまでの完全な発掘を行うことができたのは、

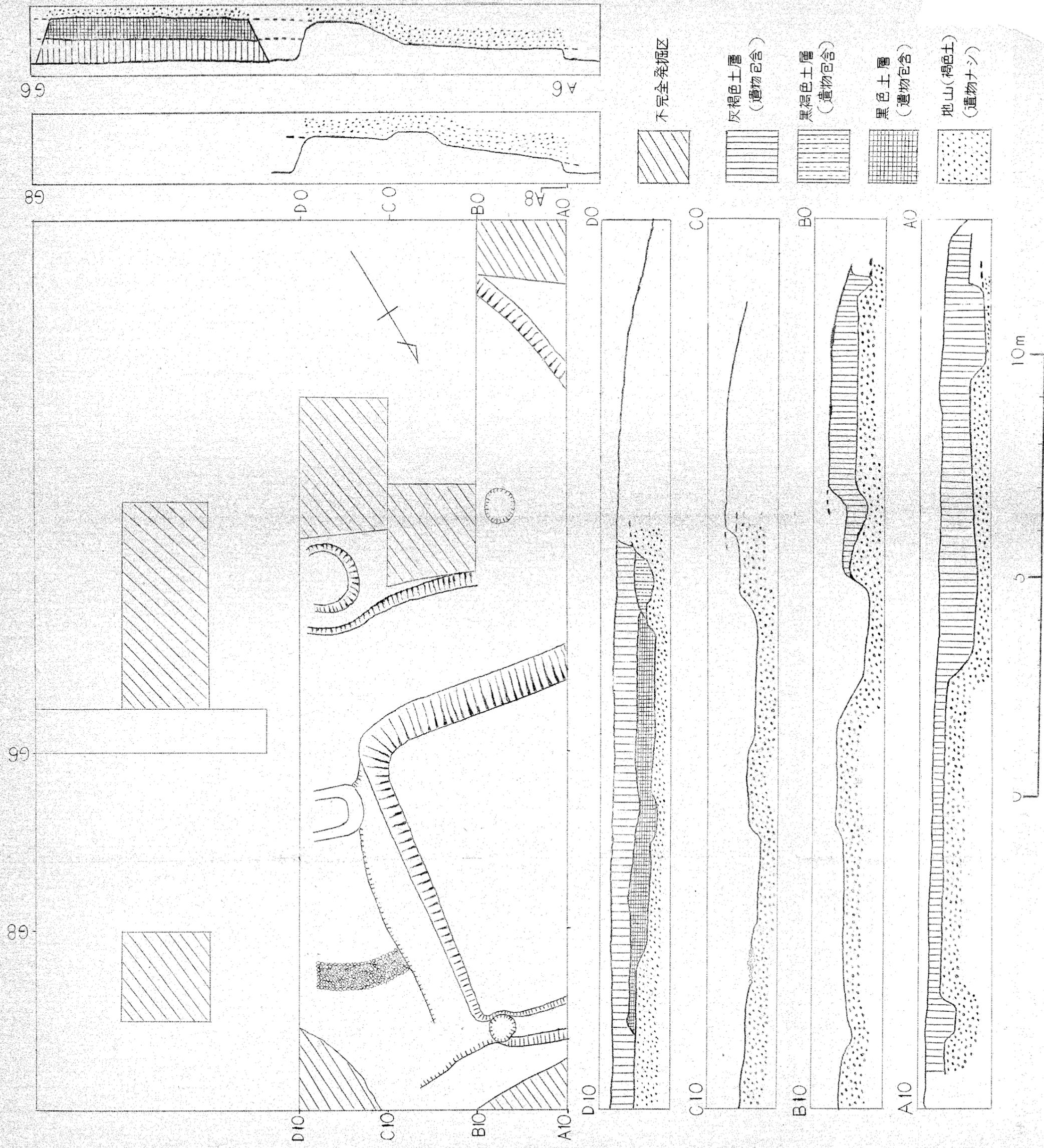
B1の北部約三分の一、B2とB10、C5とC10、D4の北半分D5とD10、6のEとFの長さ五米餘、幅約一米のトレンチであ

る。その内、B10の西北隅と、D10の東北隅とは、発掘区域の北側に積み上げた排土が流れ落ちて来たために、充分には明らかになっていない。

すでに述べたように、発掘地域の南半部は、遺物の出土状態から考えて、明らかに深くまで後世の擾乱を受けている。後に発掘に取りかゝつたC区、D区において、C1とC4、D1とD3を徹底的に発掘しなかつたのは、この事実が次才に明らかになつてきたからである。この南半部で明らかになつてゐることは、B1区の西南部が掘り窪められていること、B4区の東南隅に径七五と八〇の円型の掘り窪みのあること、D4とD5区にかけての東寄りに径約一六〇のやはり円型の掘り凹みがあることである。しかし、これらを彌生式時代のものとする積極的な証拠は全く存在しない。

北半部は包含層における遺物の出土状況から考えて、高い平坦部を除いては、彌生式時代の遺構であることは確実である。

先ず注意されるのは、B5とB9、C5とC9にかけての、上面のほぼ平坦な高い部分の存在である。もつとも、この上面の直上はすでに擾乱層であるので、果して本来から上面が平坦であつたかどうかは不明である。その西方はA区の幅一米の地域（発掘せず）を経て、道路による切断面となつていて不明であるが、東部の発掘地域を見ると、各辺はほぼ互に直角をなし、また、各辺



才三図 発掘地区実測図 (8月10~11日 藤沢小野山根津池田西谷上野測 藤沢製図)

はほゞ東西、南北の方向に合致している。東辺の長さは約六米五〇糎である。南辺に副つて底部の幅約二米の溝らしいものがある。これが溝状をなすかどうかについては、何分にも発掘地域が限られているので、確實にはわからない。この溝らしい部分の西半に、土器大型片が密集していたわけである。北辺に副つて、底部の幅約五〇糎の溝らしいものがある。これもまた、地域が限られているために、はつきり溝状をなすとは断定できない。こゝからも、前述したように、土器の大型片が密集して発見されている。なおこの溝らしいものには、高い平坦部の東北角に近い場所に、径約七〇糎の円型の掘り窪みが存在している。東辺の外側には一段と低い部分が続くが、この低い部分は、6のE-Gのトレンチの状況から考えて、更に東の未発掘地域に及ぶ可能性がある。この部分においては、高い平坦部の東辺に接して、幅約九〇糎のわずかながらも一段と低い帯があることに注意すべきであろう。この帯は南端に近づくると急に狭まつて消えてしまつてゐる。この帯の東の平坦部には、北寄りの一部分に幅約五〇糎の東西に走る礫の露呈が認められ、高い平坦部の東南隅に近接して、南北の底幅約七〇糎の、恐らく隅丸の矩形をなすと考えられる掘り窪みの存在が注意される。たゞし、礫帯については、この遺跡地の地山の地層は、断面がレンズ状をなす自然の礫帯を往々含んでゐるので、これが自然的なものか、人為によるものかは確定できないけれども

この礫帯より上は遺物包含層であり、下は地山であることから考へて、人為によるものである可能性が強いと思われる。6のE-Gのトレンチは、主要発掘地域の最低部にほゞ等しい深さまで包含層であり、底は東に行くに従つてやゝ低まつて行く傾向を示すようである。

柱穴の存在には注意して発掘をつゞけたのであるが、確實に柱穴と考えられるものは殆ど検出できなかった。たゞB5区の西北隅より東八〇糎、西五〇糎の杭に平行するラインの交点で発見された径約十五糎、深さ十八糎のやゝ北東に傾斜する穴が、柱穴である唯一のものと言つて差しつかえない。しかし前にも述べたように、地山と包含層との区別がわかりにくく、特に土が乾燥すると一そうわかりにくくなるために、或は柱穴が存在していても検出することができなかったのかも知れないという不安も残つてゐる。他にも穴はあつたが、恐らく立木の根の腐つた後に残つた穴と考へる方が適當なものであつた。

発掘の終了段階における遺跡の状況は以上のごときものであるが、発掘区域が時間や労力その他の関係上、狭く限らざるを得なかつたためと、特に畿内における山手に立地する彌生式時代の住居址の参考例が殆ど無い現状から、これが如何なる性格の遺構であるかを結論することはできない。

この発掘の実態をこゝに報告して、しばらく、将来の知見の拡大を待つ以外に方法がないのは残念であるが、今の段階では致し

方がないであろう。

たゞ、これを住居址の一部と考える場合には、平坦な高い部分を主体として考えるか、その東側にある低平な部分（これが更に発掘地域の東側に拡つてゐることは、トレンチの所見から大体推定できる）を主体として考えるかの二つの解釈が可能性として存在することを附記しておこう。前者のように考えれば、高い平坦部上に建築物が存在し、その周囲に溝が掘られていたと推定できるのであり、後者のように考える場合、低平な部分を堅穴住居址の床面と推定しうる可能性があるのであつて、この場合には高い平坦部との間に、わずかではあるが更に低い帯の存在が意味を持つてくるであろう。勿論、彌生式時代の住居址においては、北九州地方で検出されているような濠の存在も考えに入れる必要があるのであつて、にわかはこの部分を住居そのものが存在した部分と断定することもできないが、いずれにしても、包含層と地山との関係が、このように自然的でない凹凸を示している以上、そこに何か特定の意味を考へうることだけは確実である。

八月十八日（木）

午後、島上高校生を中心として、今回の発掘参加者の内参集できる者が加わつて、発掘地域の埋め戻し作業を行う。なお将来の発掘（少くとも今回の発掘地域の東側は、都合のつき次才、才二回の発掘を行いたい希望がある）にそなえて、試験的に表面に石灰を厚く撒いた上で覆土し、必要な時すぐ検出できるように考慮した。これは、石灰がどの程度にこうした目的に役立つかを試験する含みも持つてゐる。

これによつて、今回の発掘作業は、一応のところ終了することになつた。

① 園寿彦「大阪府高槻市出土の銅鐸（東大教養学部『古代研究才一』、昭和二八年十二月、共立出版）参照」

出土した遺物はすべて島上高校に運び、保管をお願いすることになったが、参加五高校の秋の文化祭に、発掘の結果を発表することとし、陳列方法、全体的な説明方法等については各校で独自性を生かして行うが、最低限度の整理その他については、全員が共同して行う方針がたてられていた。

九月三日に各校の代表者が島上高校において会合を開き、これからの整理方法について打ち合せを行う。その結果、十月八日よりはじまる春日丘高校の文化祭まで、土曜日は全員、各校の事情に応じて週の内更に各一日、島上高校において整理を行ってゆくことにした。具体的な整理の内容は、土器の整理と復原、説明図の作製、写真及びスライドの整理編集である。一箇月間にて大体の整理は終了し、各校の文化祭に展示して後、再び遺物の保管は一括して島上高校にお願ひし、その後は、私が暇を見出しては、できる限りの整理や実測等を続けて来た。この作業はまだ充分とは言えないけれども、これから述べることはこれらの整理の一応の結果である。

## 石 器

数は少く、石鏃五、石庖丁一、石斧一である。

石鏃はすべて原料はサヌカイトであつて打製である。内二本は三角形で柄はなく、他の三本は柄を有する。大きさ等については次表を見ていただきたい。

図の番号	長さ	幅	厚さ	備考
1	二四	一八	三・五	八月八日、D8区発見
2	三一	二六	三・〇	八月八日、C10区発見
3	三八	二二	六・〇	八月九日、C5区発見
4	五一・五	三〇	六・〇	八月八日、D7区発見
5	五二	二一	六・〇	八月七日、D8区発見

(単位耗)

鏃1。無柄。小さいが相当精巧な作りである。先端は欠失。

(鏃はすべて才四図参照)

鏃2。無柄。粗製で左右や、不均等ではあるが、刃部は打ち欠きが細かく、のこぎり状をなしている。先端欠失。

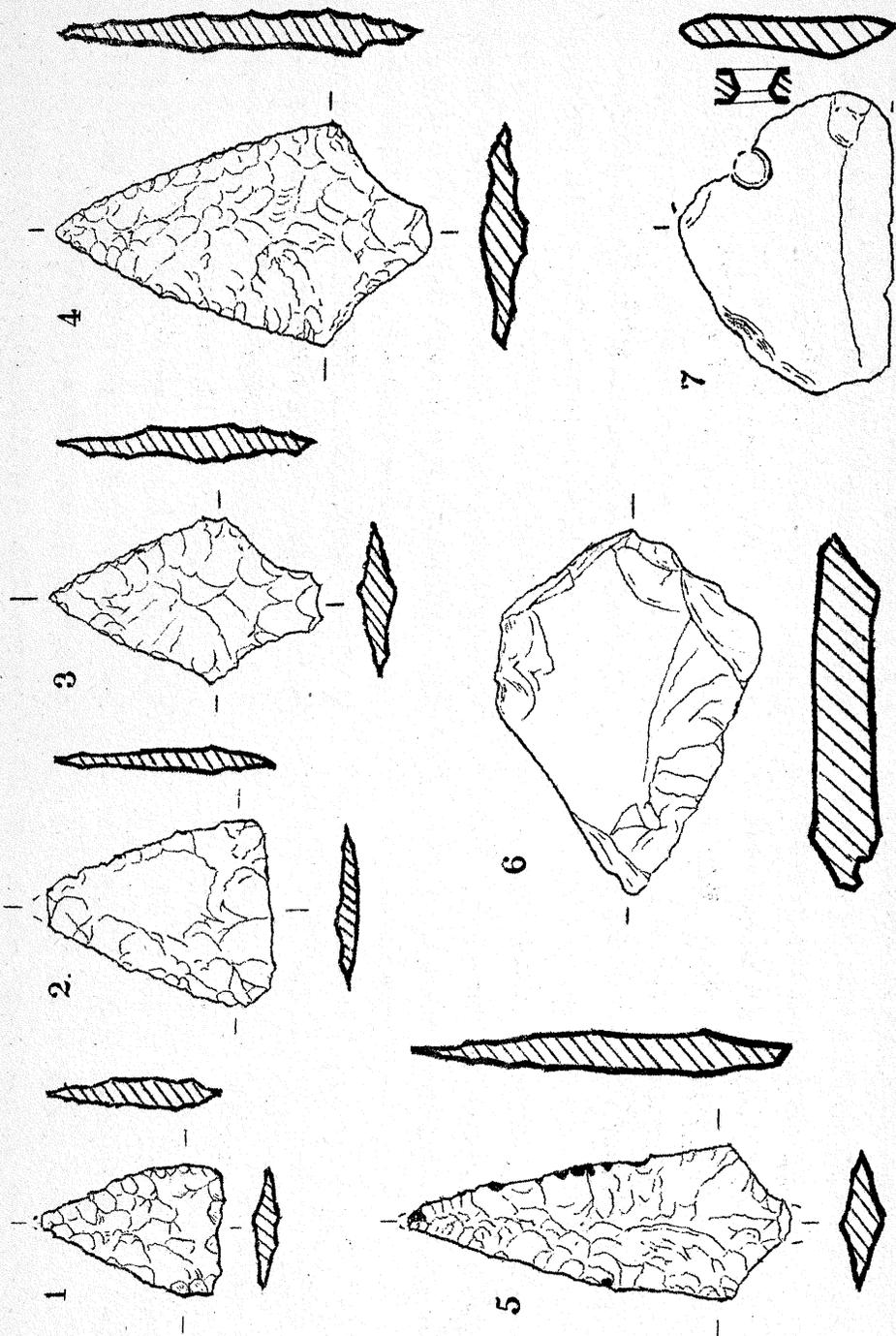
鏃3。有柄。荒い作りではあるが形は整っている。柄の端は欠失。

失。

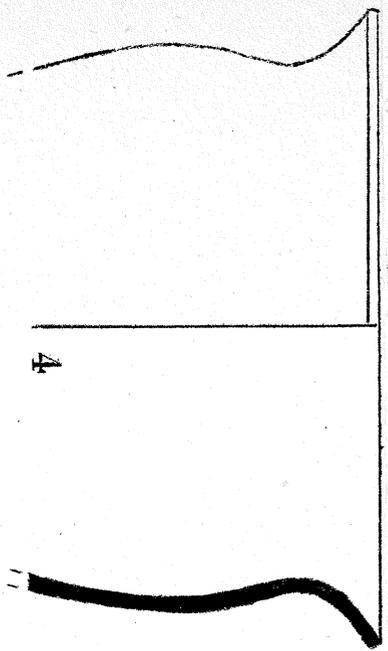
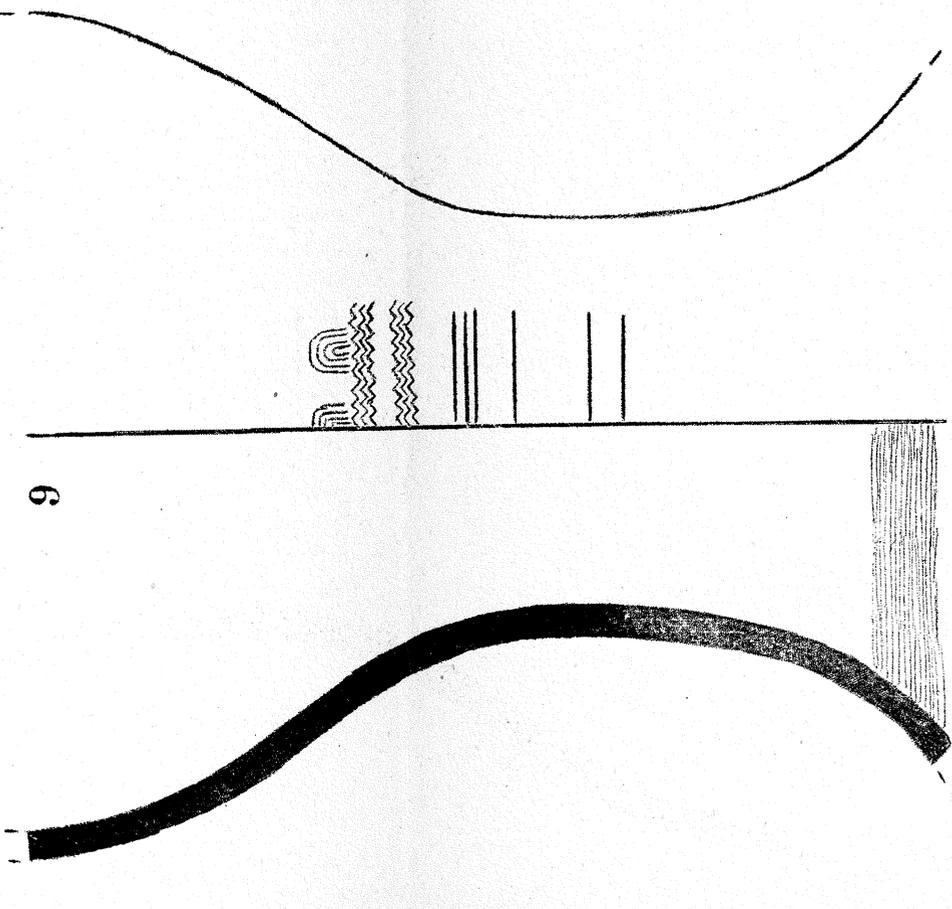
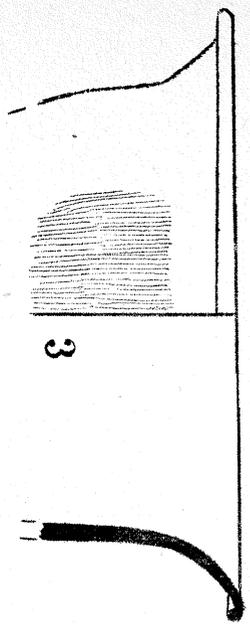
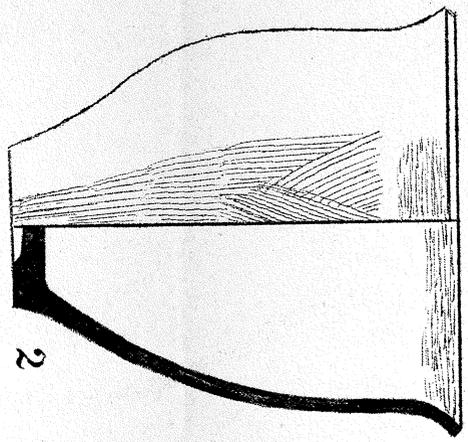
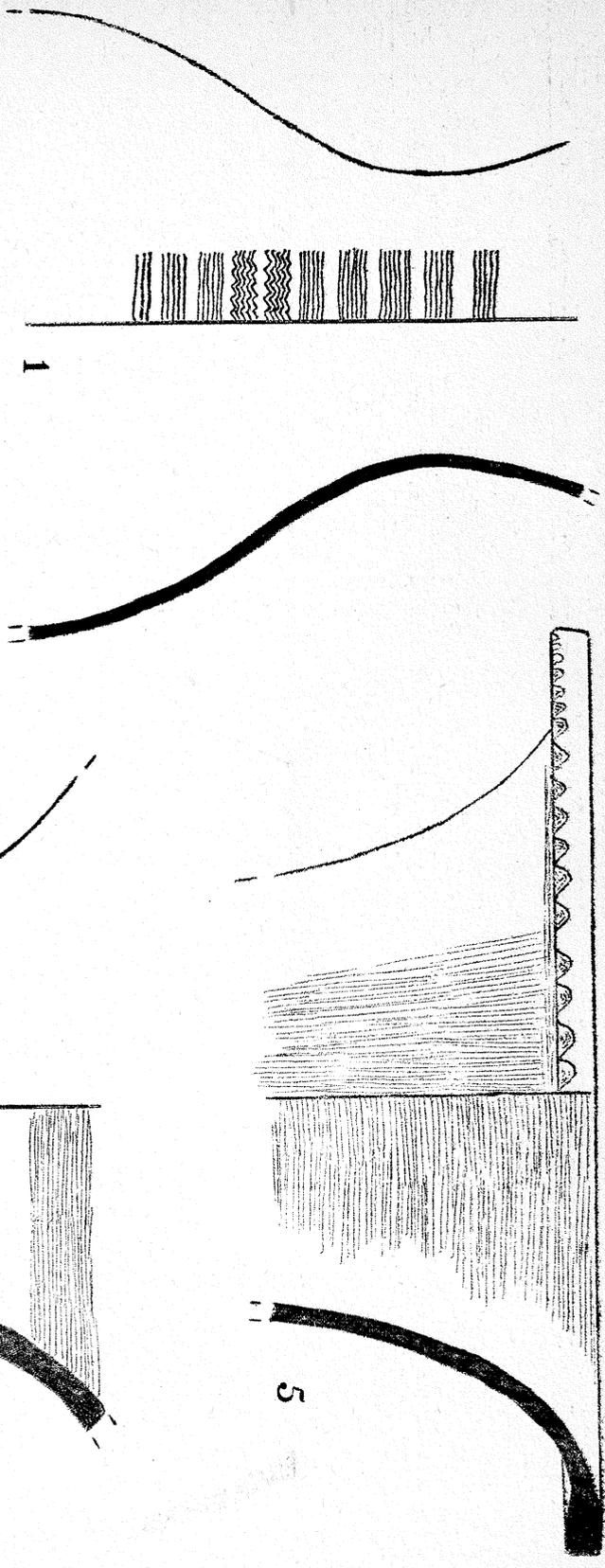
鏃4。有柄。入念で精巧な作りであつて、特に刃部の細かい打ち欠きは美しい。柄の端は欠失。

鏃5。有柄。細長いや、特異な形をしている。相当に入念な作りである。先端と柄の端は欠失。図に黒く塗りつぶした部分は発掘の際の欠失部である。断面は菱形に近い。

サヌカイトの剝片はこの遺跡にて相当多数発見されていて、石鏃の製作は恐らくこゝで行われたことを推定せしめる。その例品を一つだけ図示しておく。これは剝片と言うより原石を打ち欠い



木四图 石鏃等实测图



4

3

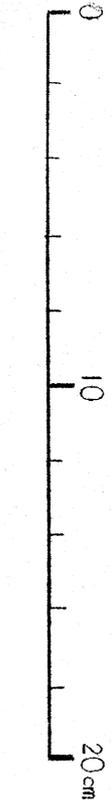
2

1

5

6

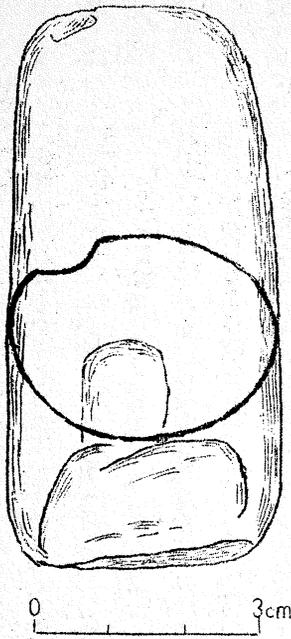
4



图六 土器实测图 (I)

た残部に近い。多数はもつと小さい割片である。(才四図、6) 石庖丁(才四図、7)。約二分の一以下の破片である。石質はよくわからないが、比較的柔らかく、作りも粗であつて、刃部以外はよく磨研されていない。片刃ではあるが、反対面もやゝカーブを示している。一孔が一部欠失しながらも残存しているが、穿孔は両面から行われ、裏側からの穿孔の方がいちじるしい。八月三日、B3区の攪乱層中より発見された。

石斧。(才五図) 大型の蛤刃石斧の破片である。惜しいことには刃部は全く欠失している。一面には刃部の方に大きな欠失(その上部のやゝ小さい欠失は発掘時のもの)、他面には頭部に近く大きな欠失(断面に現われているのはその一部である)がある。石質は輝緑岩である。磨研は可成り入念である。刃部欠失後、



才五図 石斧実測図

恐らく槌く道具として使用されたらしく、刃部の方の欠けあとにはぶくなくなっている。八月十日の発掘終了の少し前にD10区の遺物包含層の最低部近くで発見された。

#### 土器

発掘に当つて出土した土器は各地区に分けて、また一日毎に、更に必要と思われる場合には層位を分けて、すべて採集した。従つて破片を含めればおびただしい数に上る。その一々くわしい検討までには至つていないが、一応すべて目を通し、大体的見当をつけることはできた。それによれば、完型品や大型片が少いのでなかなかはっきりしないが、今运行われている分類に従えば才二様式を主体とするようである。こゝでは器形を或程度推定しうるものを取り出して説明を加えることにする。攪乱層中より発見せられた須恵器については、代表的なものだけ説明する。

#### 彌生式土器

小型甕(才六図、2)。口縁のごく一部分の欠失はあるがほぼ完形である。胎土は砂粒を相当含んでいて良質とは言えない。全体に灰色がかつた褐色を呈するが、外壁面の約四分の一は黒色を呈し、この黒色は壁内にしみ込み、相当部分にわたつて内壁面にまで及んでいる。外壁面の上部三分の一の部分には媒の附着が相当認められ、使用の際、火に当つたことを示している。底部の外面には中央に浅く広い窪みがある。口縁より下一・五乃至二・〇

糶に至るまでの部分は、内外壁面ともに水平に走る細かい条痕がみとめられこれは仕上げに当つて恐らく指又は「へら」にて器形をととのえた痕跡であろうと考えられる。これより下の部分は外壁面においては底縁まで、無造作につけられた縦方向の櫛目が一面にほどこされている。内壁面は平滑であつて何らの痕跡をも止めない。土器作りの方法をうかゞわせる痕跡は他には発見できず、「ろくろ」使用の形跡はない。器高一・七糶、口の径一一・五糶、底の径四・二糶である。この土器は、B9-10区の土器大型片密集部において、他の土器片を取り上げて行つた際に、下の方から横倒しの状態で発見された。

甕口縁部片（才六図、4）。形態には特にいちじるしい特徴はない。胎土は荒い砂粒を含む。全体に明るい褐色を呈する。口縁に近い外壁面の一部にいちじるしい媒の附着を残している。櫛目文は認められない。B9-10の土器片密集部にて発見された。

甕口縁部片（才六図、3）。口縁が外へ折り曲げられている。胎土は荒い砂粒を含む。全体にやゝ灰色がゝつた褐色を呈する。外壁面には縦方向の太い櫛目がほどこされ、媒の附着もいちじるしい。八月五日、B9区にて発見

甕（？）下半部（才六図、7）。相当大型の土器の下半部である。土器の形はこれだけではわからないが、胎土に荒い砂粒の混入が著るしいところから考えて恐らく甕であろう。全般にやゝ褐

色がかつた灰色を呈するが、壁外面にはやゝ広い面にわたつて鼠色を呈する部分がある。媒の附着を認めない。この土器はB9-10の土器大型片密集部にてやゝ傾いて発見された。

細頸壺（才六図、1）。頸部から胴の上半部に及ぶ大型片であり、口縁部及び胴下部は欠失している。胎土は細砂粒を含んでいるが良質である。全体として褐色を呈するが、壁の外面の半ばは黒色を呈し、この黒色は内部にしみ込んではいないが、壁の内面にまでは及んでいない。頸部から胴上部にかけて水平の櫛目帯が十帯施されている。各々の帯は櫛目三乃至七条の束よりなるが、その上下端の櫛目がしばしば消えたりしていて粗略な施文である。上より数えて才一と五帯及び才八と十帯は直線であり、才六と才七帯は細かい波状をなすが、この波状文も粗略で不整いであり、直線もところどころゆるく曲つたりしていて丁寧な施文とは言えない。従つて文様は全般的に墮落・類型化の印象を与える。壁の内面は平滑である。成形方法を推定せしめる痕跡は発見できない。この土器はB9-10の土器大型片密集部において、やはり横倒しの状態で発見された。

大型細頸壺（才六図、6）。同じく頸部から胴上半部にわたる大型片であり、口縁部及び胴の下部は欠失している。胎土は砂粒を混じてはいいるが良質の粘土である。明るい褐色を呈し、黒色の部分は全くない。焼成温度が他の土器よりもやゝ低いらしく、質は

他のものに比してやわらかく、そのために文様も消えかけていて不鮮明である。口縁部に近い内壁面には、整形のための作業によると思われる細かい平行の水平線が認められる。文様は頸部から胴上部にかけてほどこされ、上から言つて独立の水平刻線三本（その内、才一と才二の線との間隔はせまい）、三線よりなる水平の櫛目一帯、同じく三線よりなる櫛目の水平に走る鋭い鋸歯文二帯（いずれも中央の線だけがやゝ薄い）であり、更に下方の鋸歯文の下にこれに接して平行の四線からなる半裁の小判型文様が適当な間隔を置いて下つてゐる。文様の施し方は相当に入念であるが、器形・文様ともすこぶる大まかな感じを与える。この土器はB5区の土器大型片密集部において横倒しの状態で発見された。

壺口縁部（才六図、5）。大型の壺の口縁部であるが、これだけでは下部の形はわからない。口縁は厚く、その下部は大まかな波状をなしている。全体として明るい褐色を呈し、胎土はやゝ大粒の砂粒を含んでいるが良質である。器壁の外側の口縁から約一厘のところからは、「へら」による荒い掻き取りがあり、その更に下部は粗かい縦方向の櫛目が施されている。器壁内面はほぼ水平に走る荒い櫛目がある。口縁の外側面の一部にわずかながら丹塗りの痕跡が認められる。この土器はB9~10の土器片密集部に発見された。

高杯（才七図、2）。口縁部及び脚の一部を欠失しているが、

口縁部のわずかな部分を除いては、ほぼ全形をうかがうことができる。胎土は細砂粒を含んでいるが良質の粘土である。全般に灰色がかつた薄い褐色を呈するが、脚の一部分のみは黒色を呈し、この黒色は壁内にしみ込んでいる。焼きは彌生式土器としてはかなり良好で、堅い方である。杯部の下底に近い外壁面の一部には縦方向の「へら」けずりの跡が認められる。恐らく脚をつけた後の形を整えるための作業によるものと考えられる。杯はやゝ傾いていて、全体の形は不整形になつてゐる。杯部に一孔がある。この孔は内側から指で押し開けた感じのもので、勿論、焼く前に開けられたものである。恐らく縦につけられた把手の外れた跡であろう。この土器は、八月五日に発掘地域の北側の畑地で表面採集を行つた時に得たものである。

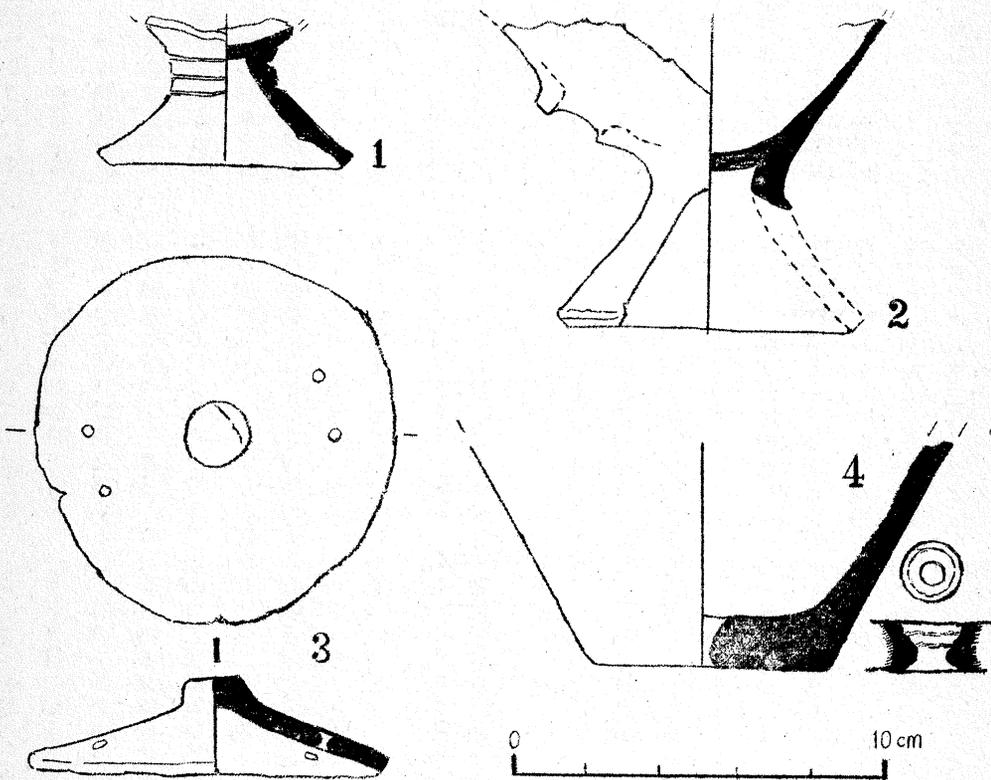
小高杯（才七図、1）。上部は欠失している。胎土は細砂粒を混じているが良質の粘土である。全般に灰色がかつた薄い褐色を呈するが、脚下部の一部は黒色を呈し、この黒色は壁の中心にまでしみ込んでいる。焼成温度は比較的低かつたらしく、質はやわらかい。脚下部の内壁は「へら」状のものによつて水平にけずり取つた跡がある。杯部と脚部との境目のあたりの外壁面に一条の深い刻線があり、器の周囲をほぼ三廻りしている（図では平行する三本の刻線のように見えるが、実は一本が三廻りしているのである）。八月三日、B2区にて発見された。すぐ近くに次に述べ

る器蓋が存在していた。

器蓋(才七図、3)。完形である。

割り合い大粒の砂粒を含んでいて、胎土は上質とは言えない。焼きが悪く、非常にもろい。全般に明るい褐色を呈するが、裏面の一部のみ黒色で、この黒色は壁の中央までしみ込んでいる。対蹠の位置に二個ずつ、計四個の孔がある。全体にやゝ不整形である。八月三日、前述の小高杯の近くで裏向き状態で発見された。

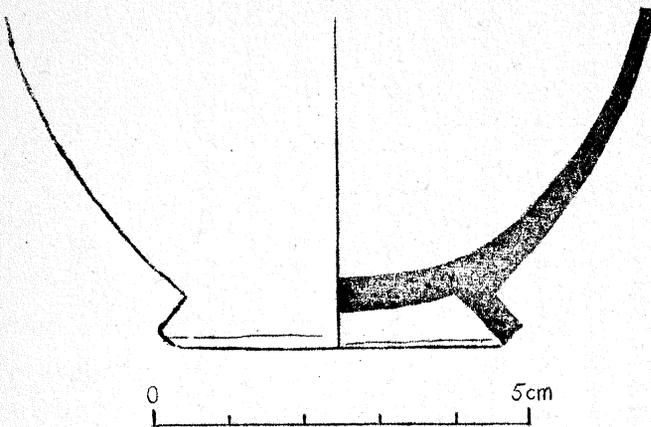
器底片(才七図、4)。上部の形は不明である。胎土は細砂粒を混えるが良質の粘土。全般的には灰色がかつた薄い褐色を呈するが、一部の壁外面に黒色に近い鼠色の広い部分があり、この色は壁の中心までくらくらしみ込んでいる。器底の中心よりやや偏して一孔がある。焼成後に上下両面から穿孔したものであるが、上面からの方が大きい。器具を回転させて穿孔したこと



才七図 土器実測図(Ⅱ)

は明らかであり、段がついている。この孔は、この土器が甑（穀物を蒸すための土器で、今の「せいろ」の役割りをするもの）として用いられたのではないかと推定させる。底部の外面には粗の庄痕らしいものが三つ認められる。この土器は八月九日にB9区の純粋な彌生式時代の包含層から発見された。

以上が彌生式土器の代表的なものであるが、後世の攪乱が何時



須惠器実測図 八才

のものであるか  
 という点の指標  
 として、須惠器  
 の代表的な一片  
 をつけ加えてお  
 こう（才八図）。  
 これは、糸底の  
 ある土器下半部  
 である。質は須  
 惠器としてはあ  
 まり固くない。  
 うすい風色を呈  
 するが、壁外表  
 面は黒色でやゝ  
 光沢がある。二面

に「ろくろ」使用の痕跡らしい水平の細線が認められるが、器形はあまり整正とは言えない。このような土器の研究がまだあまり進んでいないので、厳密な時代考定を試みる事が出来ないが、参考としてこゝに紹介し、後考を待ちたい。

以上の彌生式土器の代表的なものによつて分るように、土器の主要なものは才二様式であつて、少数の才四様式が混じている程度である。こゝから、恐らく本遺跡は部分によつてやゝ時代の異なる土器を出土するのではないかと考えられる。これは今後の調査によつて明らかにしなければならぬ問題点である。

#### 四、あ と が き

これまで述べたように、今回の発掘は、この広い遺跡のごく一部分の状態を明らかにするに止つたが、今まで資料の少い彌生式時代の住居址に対して、充分な意味づけは今の段階においては不可能とは言ふものの一つの資料を加えることができたし、又、遺物の項の最終のところに述べたように、この遺跡の年代に関する知見を確実にする一步を踏み出すことができた。更に重要なことは、高校生諸君を中心とする新しい態勢による発掘の可能性を実証することになり、郷土の歴史を明らかにする今後の運動に貴重な経験を加えたと考えられる。こゝに私とその成果をまとめる形にはなつたけれども、この仕事は三島郷土史研究会に属する諸先生と生徒諸君、暖い御援助を賜つた高槻市当局の方々、あらゆる面で御協力下さつた郷土の方々のものであり、私は単に報告をまとめることを担当させていたゞいたにすぎない。紙数の都合上、非常に数に及ぶこれらの方々のお名前はこゝに挙げさせていたゞかないけれども、この仕事はこれらの方々のものであることを重ねてお断りしておきたい。

彌生式時代という時代は、日本の純粹の原始社会である縄文式時代から、古代國家の成立までの間に介在する變革の時代であつて、その内部における歴史の發展が、後の日本の歴史の歩みを大きく方向づけた極めて重要な時代である。しかも、この時代についての研究はまだまだ不十分で、解明すべき多くの問題を残している。こゝいつた点からも、この遺跡の重要性を皆様が認識して下さい、將來の保存、研究に御協力下さることをお願いしてこの報告を終らせていたゞくこととする。

あとがき

昭和三十年八月一日から十日間、三島郷土史研究会が高槻市北部の天神山で彌生式住居址の発掘作業を行った時の調査報告が本書であります。その作業、調査状態については詳しく本文に記されている通りで御座いますがこの事業の、企画、現地指導、調査等総ての問題を総裁していたのが、東淀川高校教諭、藤沢長治氏でありましたので、事後、高槻市教育委員会は藤沢氏にその調査報告書の作成をお願いした次第であります。高槻市は之より前、数年前から市史編纂の意図を持ち、市教委内に市史編纂委員会を設置し、之が調査、編纂に当たっていたのであります。高槻市史の著明な、二大時期と考えられているのは、古代の彌生式文化の時期と近世初期のキリシタン興隆期とであります。後者は暫く置いて、前者について考えて見ますのに、既に昭和三年、京都大学農学部摂津農場の内に「彌生式文化、安間遺跡」を持つております。今度の「天神山彌生式遺跡の発掘」はこれに連るもので、当市といたしましても極めて重要な意味をもつもので御座います。依つて、市教委は市史編纂委員会を通じ、三島郷土史研究会のこの事業に協力し、且之が事後処理として、当報告を発刊いたすことにいたしました次第で御座います。この作業に炎暑の下、連日の努力をいたされました吹田、茨木、春日丘、島上、浪工の各高等学校生徒諸君及三島郷土史研究会諸賢の御労苦、別して、之が御指導と尚かゝる精密な調査報告書を執筆されました藤沢長治氏に深大な謝意を捧げる次第で御座います。

最後にいつもながら、かゝる事業に絶えず御指導をいたゞいてゐる当市教育委員各位、事務局各位、及び御援助をいたゞいてゐる市当局に更めて御礼申し上げます。

尚今後共、市史編纂事業に対する温い御協力を市民各位に希う次第で御座います。

昭和三十一年孟夏の一日

高槻市史編纂委員会にて

天 野 高 信

郷土高槻叢書

高槻市史編纂委員会

(絶版)

- 才一集 郷土高槻文化研究会編  
高槻市文化信託  
天野高信  
昭和二十六年四月十日刊
- 才二集 片山家所蔵文書目録  
阪大教授 藤直幹 監修  
昭和二十六年七月十日刊
- 才三集 高槻藩永井家文書  
阪大教授 藤直幹 監修  
昭和二十七年九月十日刊
- 才四集 高槻藩永井家文書  
阪大教授 藤直幹 監修  
昭和二十八年六月十日刊
- 才五集 高槻通史  
天坊幸彦 著  
昭和二十八年十月十五日刊
- 才六集 森田家所蔵文書目録  
阪大教授 藤直幹 監修  
昭和三十年九月三十日刊
- 才七集 高槻藩領内農村の水利問題の展開  
阪大史研究室 中部よし子  
昭和二十九年三月三十日刊
- 才八集 高槻天神山彌生式代遺跡発掘報告  
大阪府立東淀川高校教諭 藤沢長治  
昭和三十一年七月十日刊
- 才九集 森田家所蔵文書目録  
下  
近刊
- 才十集 高槻の古墳  
豊川中学校教諭 笹川隆平  
昭和三十一年九月一日刊

郷土高槻叢書才八集

高槻市天神山彌生式時代遺跡発掘報告

発行 高槻市教育委員会

編輯 高槻市史編纂委員会

右代表 天野高信

印刷所

大阪市東区豊後町五二番地

株式会社 双葉工房

電話 東(94) 七五四三番